

論文

アメリカ植民地期ニュー・イングランド における父子関係の多義性

——ジョナサン・エドワーズの手紙の分析を中心に——

篠原 明

キーワード：父性 父子関係 植民地期ニュー・イングランド
ジョナサン・エドワーズ ピューリタンの死生観

1 はじめに

西洋家族の歴史に関する従来の研究は、子ども期に関するものと母子関係に関するものが中心的であり、父子関係に関しては十分な研究がなされてこなかったと言っても過言ではあるまい。この傾向はフィリップ・アリエスをはじめとする日本に紹介された西洋家族の歴史に関する主な研究においても認められる。たとえば宮澤康人は、フランスの近代家族について、アリエスが父の権威というテーマを正面から取り上げていないことを指摘している⁽¹⁾。家族史研究においてこのように父親の問題が正面から扱われてこなかった傾向について、ジョン・デモスは1982年の時点で、「父性は長い歴史をもっている。しかしそれを研究した歴史家は事実上まだいない」と指摘している⁽²⁾。

その一方で、アリエス等の見解に批判的なリンダ・ポロクは、イギリスのデータとともにアメリカのデータも多く参照しながら親子関係について光を投じている。その中でポロクは、この時代の親子関係がアリエスの主張するように子どもに対して無関心なものではなく、愛情の伴ったものであったことを、主に当時の日記等を一時資料として用いながら論証している⁽³⁾。

このような従来の家族史研究における親子の愛情関係をめぐる対照的な見解は、当然それぞれの時代の父子関係を再考する上でも重要な論点となる。このことは、今まで「家父長制」の時代として通常位置づけられる傾向のあったアメリカ植民地期ニュー・イングランドの父性と父子関係のあり方を考察する上でも当てはまる。この時代の父親は、子どもを初めとする家族の構成員を権威主義的に支配する抑圧者であったのだろうか。それとも、そのような意味での「家父長制」という枠組みでは把握しきれない多様性を備えた

ものであったと考えた方が妥当なのであろうか。

本研究では、アメリカ植民地期ニュー・イングランド地方における父子関係を考察することを通して、家父長制の時代と称されるこの時期の父子関係の多様性を明らかにすることを試みる。特に、論考の後半では、18世紀前半の植民地期ニュー・イングランドの知識層を代表する思想家ジョナサン・エドワーズ（1703-58）の父子関係を、彼が子どもたちに書いた手紙を分析することを通して検証する。

論述の構成は以下の通りである。まず、従来の主な家族史研究の中から父子関係における二つの重要な視点（「父子関係の厳格さと親密さ」と「子どもの扱い方」）を、ポロクの論点を批判的に用いることにより浮かび上がらせる。次に、この二つの視点から、植民地期ニュー・イングランドにおける父子関係を、昨今の家族史研究と父性の歴史研究の成果を基に分析する。最後に、この時期の父子関係の事例として、エドワーズの手紙を分析する。

2 父性の歴史的記述に向けての家族史の視点——ポロクを中心に

アリエス等に代表されるヨーロッパに関する家族史研究と近代家族観に対して、ポロクは包括的かつ根源的な批判を試みた。ポロクによると、従来の子どもの歴史に関する多数の学者による主学説は、以下の三者に要約される。第一に、子ども期という概念について。17世紀以前の子どもにとって、子ども期という概念が存在しなかった。子どもは社会の最下層階級に属し、考慮には値しないと考えられていた。第二に、格式ばった親子関係について。親子関係は格式ばったもので、子どもにとって親は遠く近づきたい存在で、一方、親にとって子どもは身分が低いからその要求や欲求にこたえてやるだけの値うちがないと考えられていた。第三に、子どもの扱い方について。18世紀以前及び19世紀初期には、子どもは時には残酷だと思われるほど搾取されたり、「今日信じられないような屈辱的な行動に耐えていた」⁽⁴⁾。

ポロクは日記、自叙伝、新聞記事という資料に基づいて、子ども期、親子関係、子どもの扱い方という三点について次のような結論を提示している。第一に、子ども期に関しては、中世社会や初期ピューリタン植民地において子ども期という概念が存在していたことを、彼女の研究もまた他の学者たちも支持しているとポロクは主張する。この点は家族史において子ども観を考

える上で重要な問題であるが、ここでは父性の問題に焦点を絞るために、子ども期の問題はこれ以上扱わない。ここで注目する必要があるのは第二と第三の点である。第二に、親子関係に関してポロクは、16世紀から19世紀にかけての子育てや子どもの生活における連続性を強調し、そこで起こった変化は極めてわずかであったと見なしている。これらの時期を通して親子関係は、格式以上に、子どもの発達段階に対する親の関心、子どもの病気や死に対する悲しみに彩られていたと指摘している。⁽⁶⁾第三に、子どもの扱い方に関してポロクは、おそらく大部分の親が子どもに暴力をふるうようなことはしていなかったと見ている。ポロクはこう結論づける。「大部分の子どもが残忍な仕打ちなど受けていなかったことがはっきりした。体罰を行使した親もいたが、多くの場合まれな処罰法であって他の方法で試みて効果のなかった場合に限られていた。……子どもに対する残虐行為は今まで主張されてきたほど広く行なわれていたものではないと推測できよう」。

以上のように、18世紀中葉以前の親子関係と子どもの扱い方については評価が分かれている点は十分に注意する必要がある、さらなる研究に基づいて慎重な判断が下されなければならないことは明らかである。そうであるとしても、ポロクの研究に基づくと、「格式ばった親子関係」と「抑圧的な子どもの扱い方」という二点が、この時代の父性のあり方を考える上での重要な視点として応用しうることは間違いないだろう。

3 家族の歴史から父性の歴史へ

——アメリカ植民地期ニュー・イングランドにおける父子関係

アメリカ植民地期における父性像は、従来社会史家たちによって、「家父長的父性」(ロタンド)、「厳格な家父長」(エリザベス・ブレックとジョゼフ・ブレック)などと形容されている。⁽⁸⁾このように、アメリカ植民地期の父性が「家父長(制)」という一語をもって理解される傾向にあったのに対して、リサ・ウィルソンは北アメリカの男性の歴史の研究は、従来19世紀と20世紀に集中しており、植民地期における男性の歴史はいまだ十分な研究がされていないと指摘している。ウィルソンは指摘する。「植民地期ニュー・イングランドの男性たちに関する記録は、家父長制がもっとニュアンスに富んだものであり、特に家庭の領域ではそうであったことを示唆している」。⁽¹⁰⁾

ウィルソンによると、植民地期のニュー・イングランドにおいて、家族の

メンバーは一日のうちの多くの時間をともに過ごし、ともに働いていた。家族のメンバーは「相互依存」の関係にあった。すべてのメンバーが家族全体の幸せと繁栄のために貢献していた。そのような相互依存の網の目の中で、男性は自分の家庭を通して家族と地域社会に奉仕することにより、自らの価値を証明した。その意味で、「役に立つこと」(usefulness)を通して男性は一人前の大人としての地位を自らのものにした。⁽¹¹⁾ その一方で、夫としても父親としても最重要な努めである家族を養うという役割を果たさない(果たせない)男性は、社会からの軽蔑を身に受けた。⁽¹²⁾

その一方で、この時代の父親の特徴としてよく指摘されることは、父親が子どもに対して自分の感情を抑えていたということである。このように抑制された父子の情緒関係はどのように解釈したらよいのだろうか。これは、子どもは愛情を注ぐ価値のある存在ではないという子どもに対する無関心さから出てきている心的態度だろうか。それとも、父親が子どもに対して愛情を抱くことを妨げる別の要因があったのだろうか。

そこでこの節では、前節における家族の歴史に関するポロクの批判から浮かび上がった二点である「格式ばった親子関係」と「抑圧的な子どもの扱い方」という視点を発展させ、ピューリタニズムの教育観と死生観、そして子どもに対する愛情表現という側面から、この時代の父子関係と子どもの扱い方を検証する。

(1) ピューリタニズムの教育観と父子関係

エドマンド・モーガンによる17世紀ニュー・イングランドの宗教と家族関係に関する先駆的研究によると、ピューリタンにとって教育の究極的な目的は、「魂の救いを得ること」⁽¹³⁾であった。子どもが信仰をもつことによって魂の救いを得るために、親たちは一見すると相矛盾する二重の態度を子どもたちに対して抱いていた。それは「子どもを愛せよ」ということと「子どもを愛し過ぎるな」ということである。モーガンによると、ピューリタンの親は自分の子どもたちが不敬虔の罪に陥らないように守らなければならなかった。⁽¹⁴⁾ これは、保護することによって子どもに愛情を示すことになる。

その一方で、モーガンによると、ピューリタンの親たちは自分の子どもとの関係において自らの力を信頼することがなかった。すなわち、「彼らは愛情をもち過ぎることによって子どもを甘やかしてしまうことを恐れていた」。⁽¹⁵⁾

彼らは子どもに対して過度の愛情をもつがゆえに、子どもの性格を歪めてしまおうと信じ恐れていた。この点に関してモーガンは、結局ピューリタンの親たちは、まさに彼らが避けようとして常に自らを戒めていた失敗を犯してしまったと結論づけている。彼らは、愛情を注ぐことにおいて、神よりも自らの子どもに高い地位を与えてしまったのである。⁽¹⁶⁾

このようなピューリタンの親たちがもっていた子どもに対するアンビバレントな態度は、何に基づいているのだろうか。愛すべきであるのに愛し過ぎてはならないという態度は、ひとつに、子どもの教育の究極目標が子どもの魂を救うことであるというピューリタンの宗教思想に基づいていた。そして、一家においてその宗教的責任を負うのが父親の役割であることから、父親は母親以上に、子どもに対して自分の感情を抑えることが要求されたのではないか。換言すれば、この時代の父子関係において情緒的つながりの欠如が見られるとしたら、それは父親が子どもに対して無関心だったからではなく、子どもの永遠のいのちに関する深い関心があったという側面が考慮に入れられなければならないのではないか。この点については従来十分な注意が向けられてこなかったのではないか。スティーヴン・ミンツとスーザン・ケロッグがピューリタンの家族を「第一義的に教育的で宗教的な単位」であったと指摘しているように、この時代の父子関係は、「子どもの魂の救い」という通奏低音によって彩られていたことを考慮しなければならない。⁽¹⁷⁾

(2) ピューリタニズムの死生観と父子関係

さらに、当時の幼児死亡率の高さも、子どもの魂の救いを確かにするというピューリタンの宗教思想と密接な関係がある重要な要素である。乳幼児を含む子どもたちが常に死と隣り合わせであった当時のニュー・イングランド地方においては、子どもの魂の救いを確かにするのが、死に対する備えであった。たとえばデモスは、この時代において死を論じることは道徳的かつ宗教的な教えと直結しており、親たちは子どもが「恩寵」において前進し、最終的には「魂の救い」を得ることを目標としていたと指摘している。⁽¹⁸⁾この点は、子どもの死亡率が高いがゆえに、親たちは失われる者に対してたいした配慮も払わず、無関心な態度を取ったというアリエスの見解と対立するものである。⁽¹⁹⁾この点に関してフィリップ・グレーヴンも、ピューリタンの親たちは子どもを非常に愛していたからこそ、子どもの人生のみでなく、いやこ

の世のいのち以上に、魂の救いという死への備えについて非常な関心を抱いていたのであると分析している⁽²⁰⁾。

ここで死亡率の問題とともにピューリタンの死生観の問題を視野に入れる必要がある。すなわち、死がどのように起こっていたかという問題とともに、その死をどのように見つめ、理解し、対処していたかという問題である。この問題の全体像を理解する試みがデウィッド・スタナード著『ピューリタン流の死』である。まずスタナードは、ピューリタンの死生観を理解する上で必要不可欠な作業は、彼らの死の理解を彼らの世界観や人生観という文脈に位置づけなければならないと指摘する。ピューリタンの宇宙観や自然観を含む世界観の中から彼らの死に関する理解と態度が生まれてきたからである⁽²¹⁾。

それではピューリタンの死に対する態度を生み出した彼らの世界観とはどのようなものであったのだろうか。スタナードによるとそれは「自然の細部の隅々にわたって神の完全さ、目的、計画を見て取る世界であり、魔女や悪魔が日常的に存在することを受け入れ、それらに対して魔術や占星術で対抗した世界であり、さらには病気の猛威、飢餓、怠慢の前に無力な世界であった。夜は、20世紀に生きる者が想像するよりもはるかに暗く、昼はもっと静かで、冬はさらに恐ろしくしかも寒い世界であった⁽²²⁾」。このような世界観の中でピューリタンは、マックス・ウェーバーのことばを借りれば「個々人のかつて見ない内面的孤立化の感情」をもって、「永遠の昔から定められている運命に向かって孤独の道を辿らなければならなくなった⁽²³⁾」。このような世界観からピューリタンの死に対する思想と態度が生まれた。

このように日常的な出来事である死に直面したとき、ピューリタンの親たちは子どもたちに対してどのような態度を取っただろうか。スタナードの研究から、三つの特徴的な態度に注目する。第一は、親が子どもに対して見せた控えめな態度であり、時には距離を保つこともあったことである。この点に関してスタナードは、モーガンのような子どもを愛し過ぎて甘やかしてしまわないためであるとその動機を理解する説明に一定の妥当性を認めつつも、異なる動機がそこにあったと考えている。見習修行に代表される子どもとの「相応な距離」を保つための様々な実践は、子どもの死がもたらすショックから自分たちを幾分でも守るための「直感的な反応」であったのではないかと見なしている。親としての愛情が結局報われずに子どもが思春期を迎える前に死を迎えるかもしれないという可能性を前にして、「相応な距離」を保

っていたことは十分に考えられることだとスタナードは推測している⁽²⁴⁾。第二に、このような心理的説明に加えてスタナードは、そこに宗教的要因が加わるところにピューリタンの子どもに対する「相応な距離」を保つ態度の特徴があると指摘している。それは、「原罪」のゆえに、子どもを含むすべての人が墮落しており、従って子どもも過度の愛情を注ぐにふさわしくない存在である⁽²⁵⁾と見なされていたからである。第三に、親が、子どもたち自身と共同体の幸福のために、早い時期から罪と死を教えることを子どもたちにいわば強制してきたともいえる点が挙げられる。その一方でスタナードは、多くの子どもたちが罪と死について教えられて、非常な驚きと恐れにおびえていたことも指摘している。さらに、少なからぬ数のピューリタンの著作家たちが、子どもがこのように罪や死を恐れないとしたら、それはその子どもが霊的に失われた者であるかそうでなければ愚か者である⁽²⁶⁾印である⁽²⁶⁾と見なしていた。同様な傾向はミンツとケログも指摘している。

(3) 子どもに対する愛情表現

さらにウィルソンは、植民地期ニュー・イングランドにおける父親たちの子どもに対する情緒的つながりの特徴について、18世紀後半以降の父親たちとの明らかな違いを指摘している。植民地期の父親たちが子どもを愛していたことは、それ以降の時代の父親たちと何ら変わることがない。ウィルソンによると、変わったのは愛情を「表現するかたち」であって、「感情のかたち」ではない。後代の父親のほうが、子どもに愛情を表現するためにより簡単に言葉を使うようになったが、植民地期の父親たちも、愛情の面では変わりがなく、ただ「表現のかたち」が異なっていたのである⁽²⁷⁾。ウィルソンにとって、感情家族とは他の学者たちが主張するように18世紀末になって誕生したものではない。むしろ、その時代の家族は、植民地期が終わりに近づくにつれて、よりセンチメンタルな表現を使って自らの感情を表現するようになっただけである。したがって、植民地期の父親も、子どもに対する愛情を、いわば「異なる声」によって表現していたと考えるのが妥当であろう⁽²⁸⁾。たとえば、「多くの学者たちの見解によると、ピューリタンの家父長たちは、財産相続を遅らせることや宗教的処罰や鞭によって子どもたちを威嚇していた。20世紀末の視点から見ると、そのような宗教に基づく子育ては良くて⁽²⁹⁾も時代遅れ、悪く言えば虐待的に映る」とウィルソンは分析する。その一方

で、私たちの目から見ると支配的で残酷かつ宗教臭く見える植民地期ニュー・イングランドの父親も、逆に彼らの目から現代の父親の姿を見れば、子どもを甘やかし過ぎ、自由放任が過ぎ、しかも宗教心のかけらもない失格者に見えるかもしれないと、ウィルソンは私たちの視点を変えるよう促している⁽³⁰⁾。

このように父親の愛情を「表現するかたち」と「感情のかたち」とに区別するウィルソンの見解に対しては、ヘレナ・ウォールが両者を単純に切り離すのではなく、むしろ「表現するかたち」の変化がどのような絡みで「感情のかたち」の変化につながっているのかこそを歴史家は解明する必要があるのではないかと疑問を投げかけている⁽³¹⁾。この点はさらに慎重に検証する必要があるとしても、ウィルソンが提起した父親の愛情を「表現するかたち」と「感情のかたち」とに区別する視点は、植民地期ニュー・イングランドの父親たちの一見格式ばって権威主義的な「表現するかたち」の中にどのような「感情のかたち」が隠されているのかを丁寧に読み解くことにわれわれの関心を向けた点で、重要な研究であると見なすことができる。

(4) 子どもの扱い方——それは抑圧的なものか

ポロクの分析によると、19世紀以前において子どもは時には残酷だと思われるほど搾取されたり、今日信じられないような屈辱的な行動に耐えていたと、従来の歴史家たちは主張している。それに対してポロクは、大部分の子どもたちは残酷な扱いなど受けていなかったことを論じた。植民地期ニュー・イングランドの父親たちは子どもをどのように扱っていたのだろうか。

この点に関してグレーヴンは、植民地期アメリカにおける三つの異なる気質のパターンを区分し、分析している。グレーヴンが区分する三つの異なる気質のパターンとは、「厳格派」気質、「中庸派」気質、そして「寛容派」気質である。この三つの気質のパターンはある特定の時代に、ある特定の地域の、ある特定の人々の間にのみ存在するのではなく、イギリス系アメリカにおける多くの時代、地域、人々の間に存続した気質であるとグレーヴンは分析している⁽³²⁾。

「厳格派」気質とは、自己に対して永続的な敵対心をもっており、自己の意志と価値を否定し、自我を消滅することによって神の意志に一致することができるという心的態度である。そのために劇的な宗教的回心を求める。そ

こでの子どもに対する扱いは、子どもの意志を砕き、子どもの従順と服従を要求するものである。親の権威は絶対的である。⁽³³⁾「中庸派」気質とは、いかなる極端も避けて中庸を目指し、義務と欲望という両極の間を行くことを求める。自己否定の必要性を認めつつも、厳格派のように自己が墮落しきっており完全に自己を無にしなければならないという立場を決して受け入れない。彼らはその意味で自己肯定的である。子どもの扱い方においては、決して子どもの意志を砕く必要を認めず、かえって親は子どもの意志を曲げることで、敬虔かつ有徳な性格を養おうとする。親の権威は制限つきで認められている。⁽³⁴⁾「寛容派」気質とは、厳格派や中庸派が関心をもつほとんどの問題に無関心な態度を取り、自己に満足し自信をもっている。彼らにとって自我とは抑圧されるものでもコントロールされるものでもなく、むしろ自我は主張されるものである。概して、心の敬虔や個人的な宗教体験には興味をもたない。子どもの扱い方の特徴は、子どもを無制限に甘やかすことであった。厳格派や中庸派と違い、「上品な」親たちは子どもをしつけたり服従させることなく、規律の欠けた気ままな態度で子どもを甘やかした。⁽³⁵⁾

以上のような厳格派、中庸派、寛容派という植民地期アメリカの三つの気質のパターンを見ると、従来「家父長制」の名のもとにこの時代の特徴とされていた権威主義的父親は、第一の厳格派気質をもつ親に最も当てはまることは明らかであろう。その一方で、グレーヴンによる三つの気質の分析は、アメリカ植民地期の父性像と父親の行動が、ともに権威主義的父というカテゴリーでは把握しきれない多様性に富むものであったことを示唆していると解釈することができる。換言すれば、植民地期アメリカの父親は、決してグレーヴンが厳格派気質と呼ぶような権威主義的で抑圧的な家父長のみであったのではなく、中庸あるいは寛容な父親も同時に存在していた多様な時代であったと位置づけることができる。⁽³⁶⁾

この点に関して、E. プレックと J. プレックも、植民地期アメリカにおける父親の理想像が「厳格な家父長」であったとしても、実際の父親としての行動は多様であったと指摘している。父性の多様性に関して E. プレックと J. プレックは、グレーヴンが分析した三つのプロテスタント気質に加えて、アメリカ社会がもつ「民族的・人種的多様性」を挙げている。先住民族、ヒスパニック、そして黒人それぞれに属する父親たちは一様に「厳格な家父長」を父親の理想としていたが、父親の権威の行使の仕方はそれぞれ異なっ

(37)
ていた。

以上のように、植民地期ニュー・イングランドにおいて父による子どもの扱い方は、ピューリタニズムの影響のもとに、子どもの意志を砕き彼らの従順と服従を要求するというひとつの傾向があった。その一方で、この厳格派気質はその他の中庸・寛容な気質をもつ人々と同時代的に並立していたと見るべきである。このような父性のもつ多様性は、人種、階級等の諸要素を考慮に入れるとさらに支持されるものと見られる。

4 ジョナサン・エドワーズの手紙

2003年はジョナサン・エドワーズ生誕300年の年である。日本ではいまだエドワーズの思想の全体像が紹介されるに至っていない。⁽³⁸⁾それでは、18世紀植民地期ニュー・イングランドを代表する思想家と一般に見なされるエドワーズの思想は、アメリカにおいてどのように評価されているのであろうか。たとえば、20世紀半ばに新しいエドワーズ研究を牽引したペリー・ミラーは「ピューリタニズムはプロテスタンティズムの真髄であり、そしてジョナサン・エドワーズはピューリタニズムの精髓である」と評している。また、ハリー・スタウトはエドワーズの思想をアメリカにおける「現代哲学と神学の思索にとっての源泉」であると見なしている。このようにエドワーズはアメリカの思想状況にとって重要な源流のひとつと位置づけられている。⁽³⁹⁾

ここでエドワーズの伝記の概略を紹介する。エドワーズはイェール大学で教育を受け、その後、1727年から彼の祖父ソロモン・ストダードが牧師を勤めるマサチューセッツ州ノーザンプトンの教会で祖父を手伝う。二年後の1729年、祖父の死に伴いノーザンプトン教会の後継牧師となる。アメリカの社会史・宗教史上重要なことは、1730年代半ばに、「大覚醒」(The Great Awakening)と呼ばれる宗教的覚醒運動がエドワーズが牧師を勤める教会を中心に、東海岸一円に広がったことである。1751年以降はマサチューセッツ州ストックブリッジでインディアンへの宣教活動に携わる。1758年にニュー・ジャージー大学(現プリンストン大学の前身)の学長に任命されるが、就任直後に天然痘予防接種が原因で他界した。彼が著した著作の中で思想的に重要なものに『意志の自由』(Freedom of the Will, 1754)がある。⁽⁴⁰⁾さらにエドワーズの有名な説教「怒る神の手の内にいる罪人」(“Sinners in the

Hands of an Angry God,” 1741) はこの時代のピューリタニズムの典型として
現在でも頻繁に言及されている。⁽⁴¹⁾

エドワーズと妻サラの間には、11 人の子どもが誕生した。エドワーズと子どもとの関係は従来どのように評価されてきたのであろうか。たとえばアン・ダグラスは、エドワーズが自分の子どもたちに対して「父親として厳格な注意」を払い、家族をよく監視していたと指摘している。ダグラスは、サミュエル・ホプキンスによるエドワーズの伝記に見られる記述に基づいて、エドワーズに対するこのような評価を下している。ホプキンスによると、エドワーズは子どものうちに頑固さや強情さが見受けられると、彼らが完全に従うまで彼らに対処したと記している。ダグラスは、エドワーズのこのような態度を 18 世紀アメリカの父親としてのあり方のひとつのモデルではあるが、おそらくその時代を代表するものではないだろうと位置づけている。その一方でダグラスは、エドワーズの死後、アメリカの中流家族における父親の権威は次第に衰退していったことは疑いえないとも述べている。⁽⁴²⁾

エドワーズはダグラスが評価するように、権威主義的な家父長として位置づけられるべきなのだろうか。あるいは彼の父子関係はもっとニュアンスに富んだものなのだろうか。イエール版『ジョナサン・エドワーズ著作集』第 16 巻には、エドワーズによる 236 通の手紙が収録されており、そのうち 116 通は従来未公刊のものであった。⁽⁴³⁾ その中でエドワーズが彼の子どもに宛てた手紙が 9 通ある。その内訳は、長女サラ宛 1 通 (1741 年 6 月 25 日付)、三女エスタ宛 3 通 (1746 年 11 月 3 日付、1753 年 3 月 28 日付、1757 年 11 月 20 日付)、四女メアリー宛 1 通 (1749 年 7 月 26 日付)、長男ティモシー宛 3 通 (1753 年 4 月 1 日付、1753 年 7 月 17 日付、1756 年 11 月 4 日付)、次男ジョナサン宛 1 通 (1755 年 5 月 27 日付) である。これら 9 通の子ども宛手紙に加えて、エドワーズが彼自身の父親ティモシー・エドワーズに宛てた手紙も 4 通あり、この合計 13 通を今回研究の対象とする。エドワーズが彼の家族関係について実質的に明らかにするような日記や自叙伝を残していない以上、手紙は彼の家族関係 (特に父子関係) を明らかにする上で彼の「肉声」を記録した有力な一次資料であると位置づけられる。⁽⁴⁴⁾

以下、エドワーズに見る父子関係が格式ばったものであったかどうか、そしてエドワーズの子どもに対する接し方がどのようなものであったかという点について考察する。特に、格式ばったものに見える父子関係の要因の説明

として、従来主流であった権威主義や子どもに対する無関心という観点からではなく、ピューリタンの流れに在るエドワーズの死生観と魂の救いに対する関心、そして子どもに対して「異なった」愛情表現の仕方をしているという点に焦点を当てる。

(1) エドワーズに見る父子関係——それは格式ばったものか

まず、手紙の形式から判断すると、エドワーズの父子関係は格式ばった側面が親しみの情よりも先に目につく。たとえば、エドワーズが彼の父親に書いた4通の手紙はいずれも「荣誉あるサー」という形式ばった尊称を用いている。そしてそれらの手紙を「あなたの忠実な息子、ジョナサン・エドワーズ」と結んでいる⁽⁴⁵⁾。しかしこの呼称に表われた堅苦しさは、エドワーズと彼の父との間に限られたものではなく、エドワーズの娘エスタが父であるエドワーズ自身に書いた1757年11月20日の手紙にも同様に認めることができる。この手紙でエスタは「永久に尊敬するわが父上へ」という呼びかけに続いて、「荣誉あるサー」と書き出している。そして、「親愛なる忠実なあなたの娘より、最大の敬意を込めて」と結んでいる⁽⁴⁶⁾。

それでは、エドワーズの手紙は格式と用件のみで、子どもに対する愛情表現は見られないのだろうか。そうではない。エドワーズが子どもたちに手紙を書く際は、固有名詞ではなく「親愛なる子よ」と呼びかけるのに対し、結びは「あなたの愛する父より」、「あなたの親愛なる父より」、「あなたの優しい最愛の父より」等の形式ばりつつも愛情を表現したことを用いている⁽⁴⁷⁾。

以上のような手紙の形式面に加えて、内容に関してはどうかであろうか。まず、エドワーズはイエール大学の学生時代に、父ティモシーの助言に対する感謝の意を手紙で伝えている。「グラント氏によって2月21日にあなたからの手紙を受け取ったことは、[私に] 大きな喜びと満足を与え、また、あなたの有益な忠告と助言、そしてそこに込められた父親らしい優しさの数々に、私は心の底からの感謝に溢れています⁽⁴⁸⁾」。エドワーズは父の忠告と助言がどのような内容のものであったかについて明らかにしていない。そうであっても、エドワーズは父のうちに、忠告と助言を与えるいわば人生の教師の姿と、父親らしい優しさが満ちていることを感じ取っている。

経済上の問題も、エドワーズの手紙にたびたび登場する。たとえば、エドワーズの姉妹ユニス・バックスが夫を亡くし、なおかつ二人の子どもをも亡

くして物心両面で困窮していたとき、エドワーズは彼の父ティモシーに対して、彼女を経済的にさらに援助するように促している⁽⁴⁹⁾。また、家族を経済的に養うことは、エドワーズ自身にとっても父親としての重要な責任として意識されていた。エドワーズは、ニュー・ジャージー大学で学ぶ息子ティモシーのために、資金を工面している⁽⁵⁰⁾。さらに、娘エスタ宛書簡の中で、ニュー・ジャージー大学学長としての招聘を受けた際、大学の給料提示額ではプリンストンでの住居の準備を含めて家族で生活することができないため、大学理事会に事態改善を求めたことを記している⁽⁵¹⁾。

それでは、子どもの学問の進歩に対するエドワーズの関心はどうであろうか。エドワーズは、自らがイェール大学の学生時代に、父ティモシー宛の書簡の中で、新年度に向けての推薦図書を報告している。その中にはガッサンディの『天文学』や『ポール＝ロワイヤルの論理学』として知られるアントワヌ・アルノーの『論理学、あるいは思考の術』等も含まれている⁽⁵²⁾。このことからエドワーズは、父親が彼の学問の内容に関心を寄せていると受け止めていたことを示唆している。さらにエドワーズは、息子ティモシー宛の手紙の中で、息子の学問の進歩を喜ぶとともに、徹底した語学力が学問のためには不可欠であると助言している⁽⁵³⁾。

エドワーズの書簡に見る父子関係に関してもう一つ目を引くことは、彼の子どもたちが様々な理由で一定期間家を離れていることである。勿論、手紙という手段は、差出人と受取人が地理的に離れたところに住んでいることを前提としていることは明白なことである。事実、エドワーズが長女サラに対して手紙を書いたとき彼女は12歳で、コネティカットのレバノンに住む伯父と伯母を訪ねていた⁽⁵⁴⁾。また、二人の娘サラとエスタは1746年9月から少なくとも数ヶ月間、ロングアイランドのイーストハンプトンに住むサミュエル・ビュエルの下に滞在しており、エドワーズは1746年11月3日付の手紙をエスタに送っている。この滞在に関してエドワーズの手紙の編集者クラグホンは、このように親戚や友人の家に長期滞在することは当時一般的なことであったと指摘している⁽⁵⁵⁾。さらに娘メアリーや息子ジョナサンもそれぞれ15歳と10歳のときに知人宅に長期滞在をし、彼らに対してエドワーズは手紙を書いている⁽⁵⁶⁾。さらには、エドワーズがニュー・ジャージー大学で学ぶ息子ティモシーが天然痘の疑いで臥せっていたときに手紙を書いているが、そのときティモシーは14歳だった⁽⁵⁷⁾。このように、エドワーズの残した手紙か

ら判断すると、彼の子どものうち少なくとも5人は十代の前半でさまざまな理由で自宅から離れて長期滞在を経験している。

以上のように、エドワーズの手紙は形式面では当時一般の格式が見られる一方で、子どもに対する父親としての優しさも、人生の教師としての助言や経済的援助に対する責任感というかたちを通して表現されていると見ることができる。

(2) 子どもに対する愛情表現——エドワーズの「異なる声」

続いて、子どもに対するエドワーズの愛情表現について、彼の手紙の分析から解明する。ウィルソンが主張するように、植民地期の父親たちと18世紀末以降の独立後の父親たちは、子どもに対する愛情を「表現するかたち」が変わっただけであって、子どもを愛する「感情のかたち」自体は変わりはないという見解を評価する上で、18世紀前半に生きたエドワーズの経験は、ウィルソンの主張を裏付けるものだろうか。それとも反証となるものだろうか。以下、子どもに対するエドワーズの愛情表現が、現代人の目から見るといかなる意味で「異なる声」であるかという問題に接近する。

まず、エドワーズ自身、父ティモシーに対する手紙の中で、その忠告と助言に父親らしい優しさが込められていたと感じ取り、感謝の意を表していることは前に見た通りである。エドワーズが父親としての「優しさ」を人生の教師としての「有益な忠告と助言」の中に見ていることは、ロマン主義的感情表現とは異なるが子どもに対する父親の優しい「感情のかたち」をエドワーズが父ティモシーのうちに感じ取っていたことを示唆している。それと同時に、エドワーズがそれを「父親らしい優しさ」と敢えて書いているところに、父親と母親の間でも優しさを「表現するかたち」が異なっていたことが併せて示唆されている。

次に、父としてのエドワーズは子どもたちに対してどのように愛情表現をしていたのであろうか。エドワーズの手紙はこの点で彼の父親としての親子関係をどのように証言しているのであろうか。第一に、子どもに対するエドワーズの父親としての愛情は、子どものことをいつも神の前に祈り、子どもに対して関心をもっているということ子どもに伝え、確信させるという姿勢に表れている。これはエドワーズのほとんどすべての手紙において明確に表れている特徴である。たとえば、1749年7月26日の娘メアリー宛の手紙

においてエドワーズは、娘に対する彼の最大の関心は彼女の「魂の健康」(soul's good) であると書き送っている。「しかし、私の最大の関心事はあなたの魂の健康のことだ。あなたが私たちからどんなに離れた所にいるとしても、神はどこにでもおられる。あなたは私たちの目の届かないところにいるけれども、それでもあなたは一瞬一瞬神の手のなかにいる。私たちはあなたをこの目で見るという慰めをもっていないが、神はあなたを見ておられる。⁽⁵⁸⁾神はいつもあなたを見守っておられる」。

エドワーズの愛情表現を示す第二点は、アーロン・バーと結婚した娘エスタに対して彼女の健康を気遣って送った手紙に見ることができる。その中でエドワーズは、快方に向かった娘の様子を喜ぶと同時に、健康上の不安が大いに残っていることを心配している。「私たちはあなたがあらゆる点でよくなったと聞き喜んでいますが、まだあなたが大分衰弱していることを心配している」。⁽⁵⁹⁾その一方でこの手紙において、エドワーズの娘に対する愛情は、二重の助言として表現されている。すなわち、彼女の肉体の苦しみに信仰的な意味づけを与えていることと、健康増進に向けての具体的な方策を与えているという二点である。第一に、彼女の肉体の苦しみに関してエドワーズは、そこに信仰的な意味づけを見るように助言している。「神はあなたに対して、この世の繁栄に一切頼ってはいけないという早めではあるが時宜にかなった警告をお与えになった。そこで私は、神があなたを回復させることをよしとしたもうなら、この世には何の幸福もないものとして生きるように助言する。……もしあなたが私たちの近くに住んでいるとしても、私たちもあなたもやがては息を引き取り、誰もが土に返ることになるだろう。それよりもさらに大切なことは、天の父なる神の存在をもち、天にあるわが家に向けて前進することだ。私たちがついには皆そこで会うことができるように注意しよう」。⁽⁶⁰⁾第二に、エドワーズは、娘エスタの健康増進に向けて具体的で詳細な助言をしている。たとえば、当時健康によいと言われていたガラガラヘビと朝鮮人参をエドワーズが苦勞して手に入れてエスタに送ったこと、またそれらをエスタが体調や好みに応じていろいろ調理できるようさまざまな調理法を事細かに記している。さらには休息を取ること、疲れ過ぎない程度に馬車や馬に乗ること、風邪をひかないように注意すること、自分の体質をよく知る医者にかかりその言うことをよく聞くこと等を助言している。⁽⁶¹⁾最後にエドワーズは、「あなたのことを神の加護に委ねつつ、私たちは日々あなたのことを祈

りの中で覚えている」と語りこの手紙を結んでいる。⁽⁶²⁾

子どもに対するエドワーズの愛情表現を表す第三点として、娘エスタが夫を亡くした際、彼が娘を慰める手紙を書いていることが挙げられる。注目すべきは、ピューリタニズムの死生観が色濃く反映した彼の慰め方である。これこそエドワーズの手紙における彼の愛情表現がもつもっとも顕著な特徴である。この点は、エドワーズの死生観と宗教観としてさらに詳しく考察するに値する問題である。

(3) 死と魂の救い——ピューリタニズムの死生観

植民地期ニュー・イングランドの人々にとって死は、現代とは比べ物にならないくらい身近な現実であった。エドワーズの手紙を見ると、死を実感させる現実が少なくとも二つあったことに気づく。その一つは病気である。たとえば、プリンストンで学ぶ息子ティモシーが天然痘にかかった疑いもたれた時期があった。また、娘のサラやエスタも病弱であったことが書き記されている。さらに、エスタの夫アロンはマラリアで死亡している。加えて、エドワーズは1748年2月14日に、娘ジェルーシャを急性の熱病のために17歳で亡くした。⁽⁶⁴⁾彼女の死についてエドワーズは、スコットランドの友人ジョン・アースキンに宛てた手紙で、ジェルーシャは「わが家族の中で非常に気立てがよく役に立つ一員であり、いつもわが家の花であると見なされていた」と描写し、少女時代から死に至るまで特徴的であった彼女の敬虔さを思い出している。⁽⁶⁵⁾エドワーズの家族以外でも、知人の一人残された息子が熱と出血で死亡したことや、彼の息子ジョナサンの幼なじみの少年デウィドが死んだことなどを書き送っている。⁽⁶⁶⁾

死を実感させるもう一つの現実は、戦争である。エドワーズの時代のニュー・イングランドは三つの文明、すなわちイギリス系プロテスタント、フランス系カトリック、そしてインディアンという三者が頻繁に戦争を繰り返した時期である。⁽⁶⁷⁾1746年11月3日付の娘エスタ宛書簡の中で、エドワーズは戦争について言及している。エドワーズは、マサチューセッツの砦がフランスとインディアンによって占領された後の戦況について、彼の住む地域は毎晩監視をされ、家の中にまで見張りに入り込まれていたが、敵によって危害は加えられていない様子を伝えている。その一方で、フランス艦隊が最近受けた嵐と病気による被害の知らせを神の手のなせる業と見なしている。⁽⁶⁸⁾

このように死と隣り合わせという現実の中で、エドワーズは手紙の中で子どもたちにどのように死について教え、またどのようにして死に備えるように教えたのだろうか。ピューリタニズムを色濃く反映するエドワーズの死生観と宗教観の特徴に関して、少なくとも三つの点を手紙の分析に基づいて指摘することができる。

第一は、エドワーズが死の現実について、子どもたちに明確に語り教えていることである。これはピューリタニズムに特徴的な態度であることは既に見た通りである。死の現実に関する言及は子どもに対するエドワーズのすべての手紙の中で、直接的ないしは間接的に見られる顕著な特徴である。たとえば、1755年5月27日付の手紙の中でエドワーズは、10才の誕生日を迎えたばかりの息子ジョナサンに対して、幼なじみでおそらくモホーク族の少年デウィッドが二週間ほど前に死んだ事実を伝えている。ここで注目すべきことは、エドワーズがこの少年の死を、息子が死に対して備えをするための神からの警鐘として位置づけて、息子がたとえ死んでも天国に入れるように準備することを強く促している点である。「あなたが回心し、新しく生まれ変わったという明白な証拠をつかむまでは、決して安心しないようにしなさい。私たちは、神があなたのいのちと健康を保ち、再びストックブリッジに安全に帰って来られるように守りたもうことを願っている。しかし、人生ははかないということはいつも覚えていなさい。あなたはいつ死ななければならないかわからないのだから、いつ死んでもいいように備えができていなければならない⁽⁶⁹⁾」。さらに息子ティモシーには次のように書き送っている。「やがて来る病と死に対して準備をするために神があなたを生き長らえさせている間に、あなたがいのちと健康を改善するように望んでいる。あなたが準備していき⁽⁷⁰⁾ようとしてまいと、死は神が定めたもうた時に確かにやってくる」。

第二に、エドワーズが何よりも関心を抱き、子どもたちに繰り返し⁽⁷¹⁾その重要性を教えているのは、肉体の健康ではなく「魂の健康」(soul's good)についてである。たとえば、長女サラに対してエドワーズは、「あなたの肉体は虚弱で弱々しいが、……あなたの魂が健全なら、あなたの肉体がどうなろうと、あなたは幸せで祝福に満ちた人になる⁽⁷²⁾」。これは、子どもの魂の救いを第一の目標に据えるピューリタンの教育観を反映している。

子どもに死という現実を教え、しかもそれを直視することを通して神に対する信仰を子どもに教えるというエドワーズの死生観と宗教観は、天然痘の

疑いもたれていた14才の息子ティモシーに書き送った手紙にもっとも顕著に表れている。「しかしあなたが病気でであろうと健康であろうと、死ぬことを望もうと生きることを望もうと、私はあなたが自分の救いを一心に求めることを望んでいる。ことばと摂理においてあなたが受けている警告を考慮に入れると、そうしなければならない理由はたくさんある⁽⁷³⁾」。このことばの中になる神の「警告」と「摂理」によって、エドワーズは何を教えようとしているのだろうか。エドワーズはここで、神の「警告」とは宗教という大切な事柄を後回しにせず最優先に考えなければならないという神からの警鐘のことであると語っている。肉体と生命の危機に際して、地上の親や友人以上に、天の父なる神と救い主を求めて頼らなければならない。その意味で、病とは神を求め救いを求めるための神からの摂理的な警告である。したがって、もし天然痘から回復したり、あるいは天然痘ではなかったとしても、もし神の明白な警鐘と慈愛を忘れてしまうとしたり、ある意味で重病になること以上に恐ろしいことであるとエドワーズは付け加える。そのときにはさらに深刻な神のさばきを招くと警告している⁽⁷⁴⁾。

エドワーズはここで、息子を脅迫しているのだろうか。現代人の目には、天然痘かもしれない息子に対して、それによる死の恐怖を前に、子どもが親の宗教を信仰するように強要しているようにすら見えるかもしれない。しかし、別の解釈も可能である。エドワーズ自身、神にこそ「唯一の希望」があり、神は神を求める者を決して見捨てたもうことはないということを確認し、その確信を病の息子に伝えている。これから三ヵ月半後の手紙では、エドワーズは一言も天然痘ということばを用いず、むしろ語学の勉強に励むことを薦めていることから、息子ティモシーは天然痘ではなかったと推測される。そうであったとしても、エドワーズが手紙でティモシーに書き送った死生観と宗教観は、単なる親の価値観の押し付けであると解釈するよりも、死を前にした子どもに対する、親の信じる限りの最大の、あるいは唯一の希望と確信を書き送ったものとして理解する方がより自然であろう。

第三に、このような死生観と宗教観に基づいて、エドワーズは生と死を見据えた上で子どもを励まし慰めていることである。このことが、天然痘の恐れがあるティモシーに書き送った手紙の中にも見られたことは、既に見たとおりである。さらに、エドワーズが夫を亡くした娘エスタに送った手紙で記した慰めのことばは次のようなものである。「あなたの天の父はなんとすば

らしくまた親切な方か！ ……実に天の父は……ご自分を信頼する者を決して見捨てたもうことがない。しかし、この光の後に暗黒の雲が戻ってきても、決して驚いたり意外なことが起こったなどと考えるはいけぬ。……かえって、神がある場合に御顔を隠してしまうようなことがあれば、それは神があなたに真実を尽くしているのであり、あなたを清め、さらにまさった光にふさわしい者として⁽⁷⁵⁾いるのだ」。このようにエドワーズにとっては、神を信じ、神の救いを経験することこそが子どもに対しての心からの願いであり、死はそれを教える最高の機会だったのである。

5 おわりに

アメリカ植民地期ニュー・イングランドにおける父子関係は、従来家父長制という枠組みに位置づけられてきたが、それは単に権威主義的な父親が子どもを抑圧するという以上に豊かなニュアンスと多義性をもつものであることを、本稿は昨今の父性の歴史的研究とジョナサン・エドワーズの手紙を資料に検証することを試みた。この時代の子どもに対する父親の愛情表現の仕方や子どもの扱い方は、現代の基準に基づいて「権威主義的」、「厳格」、「格式ばっている」と判断するのではなく、当時の世界観、死生観、宗教観、教育観というコンテキストの中でこそ解釈されなければならない。

エドワーズが自分の父ティモシーと子どもたちに宛てて書いた手紙を分析するとき、彼が理解し実践する父性と父子関係は、単に子どもたちを日夜監視して親の意志に従わせるという権威主義的なものであったという一面的な理解以上に多義的なものであったことが明らかになった。勿論、エドワーズの家庭生活の目撃者による伝記がそう証言している以上、子どもを監視し従わせるという一面があったことは考慮に入れなければならないだろう。しかし、このような父親としての権威の行使も、ピューリタニズムに基づくエドワーズの世界観、死生観、宗教観、教育観というコンテキストに位置づけて解釈する必要がある。換言すれば、エドワーズにおいて父親の権威は、ピューリタニズムの価値体系に基づく父親の責任意識を背景として理解され、行使されていたのである。

手紙を通してエドワーズは、何よりも子どもの魂を配慮し、死について子どもに語り、子どもが死に対する備えをするように助言し続けた。子どもの

生と死を見据えるこのような広い視野の下で、子どもの健康を配慮し、(特に息子の) 学問の進歩に関心を示し、経済的援助に努めるという日常生活上のさまざまな配慮があった。要約すると、エドワーズにとって、父であるとは、子どもの「魂の配慮」という広いまなざしの下で彼らの日常生活に関わることであった。これは18世紀後半以降のロマン主義的色彩を帯びた「表現のかたち」とは異なり、父親としての責任を果たすことによる愛情表現の仕方である。

今後エドワーズの説教や他の著作に基づく研究を通して、さらにこの時代の父子関係の全体像と多義性の一端を解明することに努めたい。

注

- (1) 宮澤康人「アリエスの近代と子ども・家族・学校——『〈子供〉の誕生』を超える前に」『社会史の中の子ども』宮澤康人編(新曜社、1988年)、32頁。
- (2) 引用は以下による。John Demos, “The Changing Faces of Fatherhood,” in *Past, Present, and Personal: The Family and Life Course in American History* (New York: Oxford University Press, 1986), 42. なお、主な家族史研究の文献として参照したのは以下のものである。フィリップ・アリエス『〈子供〉の誕生——アンシャン・レジーム期の子供と家族生活』杉山光信・杉山恵美子訳(みすず書房、1980年)。エドワード・ショーター『近代家族の形成』田中俊宏・岩橋誠一・見崎恵子・作道潤訳(昭和堂、1987年)。L. ストーン『家族・性・結婚の社会史——1500～1800年のイギリス』北本正章訳(勁草書房、1991年)。さらに寺崎は、18～19世紀のイギリスの父親像をその脅迫性と不安という側面から研究している。寺崎弘昭「18・19世紀イギリスの父親像——その脅迫性と不安——」黒柳晴夫・山本正和・若尾祐司編『父親と家族——父性を問う』(早稲田大学出版部、1998年)、78～109頁。
- (3) リンダ・A・ポロク『忘れられた子どもたち——1500～1900年の親子関係』中地克子訳(勁草書房、1988年)。
- (4) ポロク、363頁。
- (5) ポロク、87頁。
- (6) ポロク、371頁。
- (7) ポロク、371～372頁。
- (8) E. Anthony Rotundo, “American Fatherhood: A Historical Perspective,” *American Behavioral Scientist* 29, no. 1 (1985): 7-23; Elizabeth

- H. Pleck and Joseph H. Pleck, "Fatherhood Ideals in the United States : Historical Dimensions," in *The Role of the Father in Child Development*, 3d ed. Edited by Michael E. Lamb (New York : John Wiley & Sons, 1997) : 33-48.
- (9) たとえば、19世紀半ばのホーレス・ブッシュネルによる父性と母性の分析は拙論「ホーレス・ブッシュネルの家庭教育論における父性と母性の比較研究」日本キリスト教教育学会『キリスト教教育論集』第10号(2002年5月)、1~15頁、を参照のこと。
- (10) Lisa Wilson, *Ye Heart of a Man : The Democratic Life of Men in Colonial New England* (New Haven, CT : Yale University Press, 1999), 3. なお、19世紀から20世紀末にかけての父性の通史的研究には、R. L. Griswold, *Fatherhood in America : A History* (New York : Basic Books, 1993)、また特に1920~30年代の「新しい父性像」の登場についての歴史社会学的研究には、Ralph LaRossa, *The Modernization of Fatherhood : A Social and Political History* (Chicago : The University of Chicago Press, 1998)、がある。
- (11) Wilson, 1-2.
- (12) Wilson, 8, 114.
- (13) Edmund S. Morgan, *The Puritan Family : Religion and Domestic Relations in Seventeenth-Century New England*, Revised Ed. (New York : Harper & Collins, 1966), 92.
- (14) Morgan, 170.
- (15) Morgan, 77.
- (16) Morgan, 185.
- (17) Steven Mintz and Susan Kellogg, *Domestic Revolutions : A Social History of American Family Life* (New York : Free Press, 1988), 6 ; John Demos, *A Little Commonwealth : Family Life in Plymouth Colony* (New York : Oxford University Press, 1970), 12.
- (18) Demos, "The Changing Faces of Fatherhood," 44.
- (19) アリエス、40頁。
- (20) Philip Greven, *The Protestant Temperament : Patterns of Child-Rearing, Religious Experience, and the Self in Early America* (New York : Alfred A. Knopf, 1977), 31.
- (21) David E. Stannard, *The Puritan Way of Death : A Study in Religion, Culture, and Social Change* (New York : Oxford University Press, 1977), 31.

- (22) Stannard, 38-39.
- (23) マックス・ヴェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』大塚久雄訳、(岩波書店、1989年)、156頁。Stannard, 41も参照。
- (24) Stannard, 58.
- (25) Stannard, 59.
- (26) Stannard, 69. Mintz and Kellogg, 3.
- (27) Wilson, 139.
- (28) Wilson, 115.
- (29) Wilson, 115.
- (30) Wilson, 115-116.
- (31) Helena M. Wall, “Notes on Life since *A Little Commonwealth*: Family and Gender History since 1970,” *William and Mary Quarterly* 57, no. 4 (2000): 817.
- (32) Greven, 12-14. ポロク、131頁。
- (33) Greven, 12-13, 32.
- (34) Greven, 13, 159-160.
- (35) Grevan, 14, 269, 276.
- (36) このように子ども観の連続性を強調するグレーヴンに対して、森田尚人は「歴史的变化の位相を過小に見積る」ものではないかと懸念を表明している。森田尚人「歴史の中の子ども・家族・学校」『社会史の中の子ども』宮澤康人編（新曜社、1988年）、196頁。
- (37) Pleck and Pleck, 33-38.
- (38) エドワーズ生誕300年を記念して、2003年10月にはアメリカ・ワシントンD.C.の議会図書館（Library of Congress, Washington, D.C.）にて研究大会が開催された。<http://www.yale.edu/wje/html/JE-300.html> また、日本におけるエドワーズの先駆的研究に、森本あんり『ジョナサン・エドワーズ研究』（創文社1995）がある。
- (39) ミラーのことばは森本の引用による。森本、3頁。Harry S. Stout, “Introduction,” in *Edwards in Our Time: Jonathan Edwards and the Shaping of American Religion*, ed. Sang Hyun Lee and Allen C. Guelzo (Grand Rapids, Michigan: Eerdmans, 1999), x.
- (40) なお、イエール大学出版部は、1957年より『ジョナサン・エドワーズ著作集』を刊行中であり、2003年8月末現在で、22巻が刊行されている。
- (41) エドワーズに関する最新の伝記的研究にGeorge M. Marsden, *Jonathan Edwards: A Life* (New Haven & London: Yale University Press, 2003) がある。

- (42) Ann Douglas, *The Feminization of American Culture* (New York: The Noonday Press, 1998), 74.
- (43) Jonathan Edwards, *Letters and Personal Writings. The Works of Jonathan Edwards*, 16 vol., ed. George S. Claghorn (New Haven and London: Yale University Press, 1998), 3. なおクラグホンは、当時、書簡という形式がヨーロッパ諸国をはじめニュー・イングランドにおいても、通信手段としてのみでなく文学形態としても頻繁に用いられていたものであることを指摘している。George S. Claghorn. "Introduction," in *Letters and Personal Writings. The Works of Jonathan Edwards*, 16 vol., 3-4.
- (44) デモスはこの時代の父と息子の関係が親密であったと、息子が父親に当たった手紙の傾向を根拠に指摘している。この時代、見習修行に出た息子が家族と連絡を取るときは、決まって父親当ての手紙を書くことを通してであった。母に直接宛てられた手紙は非常にまれであった。Demos, "The Changing Faces of Fatherhood," 46. エドワーズの手紙にもこの傾向は見られる。
- (45) Edwards, 32-33, 36-38, 419-421, 701-702.
- (46) Carol F. Karlsen and Laurie Crumpacker, eds. *The Journal of Esther Edwards Burr, 1754-1757* (New Haven: Yale University Press, 1984), 295-297. ストーン、341頁。
- (47) Edwards, 96, 215, 290, 578, 580, 599, 667, 693, 732.
- (48) Edwards, 37. Wilson, 132.
- (49) Edwards, 419-420.
- (50) Edwards, 692.
- (51) Edwards, 730-731.
- (52) Edwards, 33.
- (53) Edwards, 598-599.
- (54) Edwards, 95.
- (55) Edwards, 213.
- (56) Edwards, 288, 666.
- (57) Edwards, 578.
- (58) Edwards, 289.
- (59) Edwards, 576.
- (60) Edwards, 577.
- (61) Edwards, 577-558.
- (62) Edwards, 578.
- (63) Edwards, 96, 576-577, 578, 730. なお、アーロン・バーの死因がマラリ

アによる熱であったことは、以下による。“Introduction” to *The Journal of Esther Edwards Burr, 1754-1757*, 17.

- (64) Marsden,, 327, 511.
- (65) Edwards, 249-250. Marsden, 327.
- (66) Edwards, 289, 667.
- (67) Marsden, 3.
- (68) Edwards, 214-215.
- (69) Edwards, 667.
- (70) Edwards, 598-599.
- (71) Edwards, 289.
- (72) Edwards, 96.
- (73) Edwards, 579.
- (74) Edwards, 580.
- (75) Edwards, 730.

(群馬県立渋川青翠高校非常勤講師 教育思想史・父性の歴史)